



TITLE:

ルネ・シャールの『イプノスの文書』における死の隣接と言葉

AUTHOR(S):

吉本, 素子

CITATION:

吉本, 素子. ルネ・シャールの『イプノスの文書』における死の隣接と言葉. 仏文研究 1994, 25: 181-197

ISSUE DATE:

1994-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137814>

RIGHT:

ルネ・シャールの『イプノスの文書』における 死の隣接と言葉

吉 本 素 子

序

『イプノスの文書』は、ルネ・シャールの詩集の中でも、特異な性格を示す詩集である。この詩集は、対独抵抗運動という一つの行為を選んだ詩人が、行為の渦中で書き続けた日記をもとに作られた詩集であり、ルネ・シャールの作品の中でも、これほど現実の事件の生々しい影響を直接的に示す作品はない。詩集は、一定の時間、一定の場所の刻印を強く押されている。

シャールは、1941年から連合国軍による解放まで対独抵抗運動に参加するが、その際主たる滞在地であった南仏の小村セレストで手帳に日記をつける。このうちの一部は焼かれるが、一部は写しが保存される。詩人は戦後間もない1945年7月にこの手帳の写しを『イプノスの文書』として出版する準備にとりかかり、わずかな部分を付け加え、詩集は1946年に出版される。これは、きわめて長い断章形式の詩「イプノスの文書」と、最後に置かれた散文詩「鎖のぼら」から構成されている。詩集は1942年に書かれたものを含んでいるが1943年以降の危険が増大してから¹⁾のテキストが中心となっている²⁾。

戦闘の中で、シャールは多くの友人達の死に遭遇する。1944年5月エミル・カヴァニが、6月詩人のロジェ・ベルナルが、7月ロジェ・ショードンが殺される。『イプノスの文書』はこれらの死をその直後に反映している³⁾。詩集は、これらの友人達ばかりでなく抵抗運動の協力者、さらにドイツ兵の死を記録する。死の脅威は、語る主体に行動の選択を表明させ、その原因を分析させ、存在の本質に向かわせ、救済を求めさせる。特異な状況のもとで死が詩人にどのような言葉を生み出させたかを考察するのが、本稿の目的である。

以下において、まず死の隣接が詩集全体に及ぼした影響を検討する。次に、死の脅威をもたらした者と、詩人の言葉がどのように戦うかを観察する。さらに死の隣接が明らかにする本質的なものが、どのように表現されているかを考察する。最後に、死からの救済の表明について検討する。

I 詩集全体への影響 — 非連続性

「イプノスの文書」に採用されている断章形式は、ルネ シャールが非常に好んで用いる形式であり、例えば、この詩の前後でも、『孤立してとどまる』の中の「形式の分割」、『粉碎された詩』の中の「蛇の健康を祝して」でこの形式が採用されている。しかしこの二つの詩についていえば「形式の分割」は詩と詩人についての省察を集めたものであり、また、「蛇の健康を祝して」は最も長い断章でも四行を超えず、アフォリズムの集積と云うように、両者ともある種の統一性が見出されるのに対し、「イプノスの文書」は特にきわだった非統一性を示している。すなわち、各断章の文体はアフォリズム、レシと呼びうる目前の記録、あるいは状況の分析、抒情的音楽的断章という具合にきわめて多様であり、しかもこうした多様性は何らかの統一化に向けて組織されずに、それぞれが異なった特質のままに並置されている。こうした非連続性は、断章の文体の性質のみに見出されるばかりではなく、内容の面にも認められる。強固な意志や高揚した意識が表現される部分と、絶望、無力感、衰弱の記述とが、隣り合って共存しているのが随所に見受けられる。

こうした非連続性はまず、序の中で述べたように、日記をもとに作られたことに由来する。『イプノスの文書』のもとになった手帳は戦争という特殊な状況のもとで、日々生起する事件の直接的な影響下に産み出されたものである。従って手帳の記述は、結末が分からないまま、偶然性に支配され続ける。又、この手帳は自分の選択した行動が現実の世界の中で最大限の効果を上げることを望んでいる、生来内省的な詩人によって記載されている。従って、その記述には外的な記録と内的な省察とが共存する。

しかし、『イプノスの文書』の非連続性の根本的な原因は、手帳を書きとめた詩人自身の連続性の拒否に求めなければならないだろう。そしてこの拒否の理由は、まさに不合理な死の強制という体験にほかならない。「イプノスの文書」の冒頭の部分には次のように書かれている。

死刑に処せられた血を見ることが、かつてこの覚書の脈らくを失わせ、その重要性を無にした⁴⁾。

突然断ち切られる生、この無への変化の絶対性を前にした時、脈らくをつけること——連続性の希求——は全く無意味なものとなる。断章の57には、

根源は岩だ、そして言葉は切断される⁵⁾。

と書かれる。承認できない死が詩人の住む世界を支配する時、通常流布しうる意味を産み出す言葉の連続性は、詩人を納得させることができない。「根源」という主語に対し、理解の容易な連続性を持った属詞を置くことを拒否すること、すなわち、連続性を切断することによって、詩人は、人がかつて経験したことのない世界を表現しようとする。

さらにまた、手帳に書きつけられた言葉の非連続性は、手帳が『イプノスの文書』として最終的にまとめられる際に、強固に保持される。序に述べたように『イプノスの文書』には、手帳にない部分を書き加えられ、又ページの順序も変更されている⁶⁾。すなわち、シャールには確かに、ゆるやかな再構成の意志があったわけである。従って手帳の非連続性の保持は、きわめて意図的なものといえよう。先に引用した冒頭の部分は、『イプノスの文書』全体に関する詩人の姿勢を述べたものだが、その中には次のようにも書かれている。

これらの覚書は、自己愛、中編小説、金言、長編小説に何も負っていない⁷⁾。

日々に書き留められた断章を再構成する際に、シャールは、文学的な虚構の過剰な介入によって断章に統一性を持たせることを拒否する。それは自己陶醉への傾きを一切斥けるためでもあった。

II 戦う言葉

(1) 行動の方針を述べる断章

『イプノスの文書』は行動を選ぶ決意を述べる四つの断章によって開始される。以後、行動の方針を述べる断章は断続的に続き、作品の最終部分で急に少なくなり、かわって救済を祈る断章あるいは讃歌と呼びうる断章といった音楽的断章が主調となる。行動の方針を述べる断章の形式で、最も目につく形式は、命令の形式であり、それは、主として二人称単数形の命令法と、不定法による命令形から成る。二人称単数形の命令法は、語る主体自身に対する命令を表現する。使用されている断章はすべて、きわめて短く、凝縮した表現が強固な意志を示し、いわば詩人の肉声を伝えている。たとえば、断章2のように。

結果のわだちにはまりこむな⁸⁾。

不定法による命令形も同様に、非常に簡潔な断章においても用いられるが、同時により長い断章

において、je を主語にする構文や、il faut を用いる構文などの他の構文とともに用いられる。この時、不定法は、観察や分析などから引き出された行動の原則を表現する。不定法もまた語る主体自身に対する命令である。命令法と不定法は同程度に使用されており、語る主体の行動への意志が、激しい感情と、分析的かつ冷静な意識の両方に支えられていることが理解される。

この行動の方針を述べる断章について注目すべきことは、ここにどのように詩を書くかについての断章が含まれることである。言葉はこの例外的な状況のもとで、高踏的なものではなく、戦うために不可欠なものである。断章178には「本質的な言葉、すぐさま救済を運ぶ言葉⁹⁾」と書かれ、又断章182には「収容された山々のためのリラ¹⁰⁾」と書かれる。どのように詩を書くか、とはこの作品においてはどのように行動するかと同じ意味になる。言葉と行動とのこの一致は、極度に引き縮まったいくつかの断章となって結実する。例えば、ランボーを踏まえていることが容易に見てとれる¹¹⁾断章212

穴をうがつ未知なるものの中に沈め。努めて旋回せよ¹²⁾。

において。簡潔さが多義性を産み出しているこの断章では、未知なるものの中に深く入り込み、停滞を拒否して激しく動き続けることが命じられるが、それは、詩の創造される状態を表現したものであり、又同時に、現実の未曾有の不合理に満ちた世界をありのままに受け入れ¹³⁾、この中で反抗し続けるべきであると表明したものである。断章の中で詩作と行動は不可分に一体となっているのが観察される。

言葉は行動のためにあり、行動は共同の性格を持つ。そこで行動の方針を述べる断章に、又別の変奏が加えられる。すなわち詩人の取るべき態度について規定した断章である。例えば断章19の初めの部分を見てみよう。

詩人は「言葉」の成層圏に長くとどまることはできない¹⁴⁾。

ここでシャールは断章114（「僕は承諾の詩は書くまい¹⁵⁾」）で用いられている一人称単数形の主語“je”を使用せず、「詩人は」という三人称の主語を使用しているが、ここでは、語る主体自身の決意が述べられていると言えよう。「詩人は」という三人称の主語の使用が示す、語る主体の一般化は、主体が自分を共同の存在とみなしているところから産まれている。

(2) 状況の記録

レシとも呼びうる、主として過去時制で語られるこの種類の断章が見られることは、「イブノスの文書」のきわだった特徴である。シャールは目前に生起する事件を冷静にまた正確に記録する

ことによって、ナチズムが示す神話化の虚偽に真実を対置しようと望む。真実は、英雄的な輝かしいものではない。記録はしばしば抵抗運動の仲間の中に漂う無力感、衰弱、不統一をも語る。描写の冷徹さはとりわけ語る主体自身に向う。例えば断章128では、語る主体の内部の心理が弱さをも含めて克明に記録される。

[……] 私は不幸な男はまだ五分間黙っているだろう、それから、いやおうなく、彼は話すだろう、(傍点は原文はイタリック)と予測していた。私はこの決着の前に彼が死ぬことを望んだことを恥じた。[……]¹⁶⁾

この種の断章の最も著しい特徴は、強い伝達可能性を持っていることであろう。断章は闘争の中にある集団を記録し、それを伝えることを意図する。記録の正確さは、文体の抑制に支えられている。例えば断章99には、対独協力拒否者をかくまった身体障害者の殺害が記録されるが、この中では、語る主体の感情は表現されない。ただこの障害者に対する「死んだヤマウズラのような」¹⁷⁾という直喩が測り知れない惻隠の情を、あえて使用された「彼らの笑い」*«LEURS RIRES»*¹⁸⁾の大文字が激しい怒りを表現するのみである。

記録の文体の他の際だった特色は、その簡潔さである。簡潔さは省略から産み出される。しばしば、名詞のみの文が使用され、記録はメモのような様相を呈する。例えば、先に引用した断章128の次の文のように。「一つの声が腫れた身体の上に、わめきながら傾いていた、『彼はどこだ？ おれたちを連れていけ』、続いて沈黙。そして雨のような足げりと、ステッキによる殴打¹⁹⁾。」シャールは、断章31で、「長々と述べることは偏執に通じるだろう²⁰⁾」と書いている。簡潔な文体の選択は、事件を記録するにあたって事実のいかなる歪曲——美化にしろ、被害妄想にしろ——をも避けようとする姿勢の現われである。

(3) 明晰さの保持——分析

断章38でシャールは、「その難破が運命の海の上に跡すら残さないおそのある文明²¹⁾」と書いている。詩人はこの徹底的な文明の崩壊の危機を避けるために、その根本的な原因を探り、危機をもたらしたナチズムの「集団ノイローゼ²²⁾」に明晰さを対置しようとする。このために、客観的な筆致、概念的な語彙、復文の多用を特徴とする分析的な断章が書かれる。明晰さは、集団的な陶醉に対置される、覚醒した精神の繊細さから産み出される。それは混同されやすい二項の区別に立脚する次のような分析の中に観察されよう。

懷疑は、あらゆる偉大さの起源に見出される。[……]それを力と感覚の分散が生じさせる確信のなさに関連づけるな²³⁾。

分析は、戦闘状態にある詩人によって行なわれているので「悪」「悪人」といった二元対立的な語彙もしばしば見られる。しかし分析の結果は、こうした二分法的発想を超える²⁴⁾。たとえば断章29では、

現代は、その非常に特殊な授乳によって、かつて社会が彼らに対してたてた柵を楽々と飛び越えるごろつきどもの繁栄を促進する。この悪党どもを刺激する力学そのものは、その醜悪な蓄えが汲み尽される時に、それ自体砕けながら彼らを打ち砕くのだろうか？ [……]²⁵⁾

ここにも「悪党ども」のような二元対立を表現する単語が見られる。しかし、「悪党ども」を繁栄させているものは、時代そのものであり、彼らを養っているものは、時代に特有な機構（「特殊な授乳」）である。すなわち悪は、観察している語る主体と無関係な位置に偶発的に発生しているわけではなく、主体を含む時代の力学そのものから生み出されていることが観察されている。語る主体は、さらにこの力学自体が「悪党ども」を巻き込みながら自滅することを予測するが、この予測はあくまで疑問文で表され、分析の独断を忌避する性質を示している。

戦闘下にあってすら、悪を社会の機構の必然的な産物と考察する詩人は、戦争が終わる時点でも、勝利に酔うことはない。分析は変らない鋭さを保ち、悲観的な調子はむしろ増している。断章220で「私」は終戦の近づいた状況下の人々の様子を観察し、現状を分析する。「ここで、人々は抽象的なものを要求する準備を整え、あそこでは今世紀の人間の条件の残酷さを弱めることのできるすべてのことを盲目的に追い返し、この残酷さが自信のある足取りで未来に近づくようにさせる。……人間の骨にまで滲み込むこの雨、それは攻撃の希望であり、侮辱に耳を貸すことだ²⁶⁾。」文明の崩壊の危険をもたらした時代の「人間の条件の残酷さ」、あるいは人間に内在する攻撃性は、終戦によって除去されたところか、むしろ助長されていることが冷静に記述されている。戦争の始まる時にシャールが明晰さを対置したのは、ナチズムの「集団ノイローゼ」に対してであったが、断章220では「その医学を無視する魂が、きずとノイローゼの堆積でである亡霊たち²⁷⁾」と書かれる。すなわちここで「亡霊たち」は語る主体の周囲に存在し、ノイローゼは敵の精神状態ではなく、同胞の間に蔓延している。語る主体は、自己の属する共同体の中に、文明の危機の原因となる集団的盲目さを確認しつつ、それに明晰さを対立させ続ける。

III 死の照らし出すものとその表現

断章90には、死の隣接と生との関係について次のように書かれている。

人はかつて、時間のさまざまな部分に名前を与えた、これは一日、あれは一ヵ月、あれらのからの教会は一年だった。今、ぼくらは死が最も暴力的で、生が最も良く定義される一瞬に近づいている²⁸⁾。

死が生のあるあらゆる表面的な覆いを取り去る時、存在そのものがその本質において定義される。「イブノスの文書」のおそらく最も独創的な断章は、こうして死によって照らし出される時間、人間、詩などに関する省察の書かれた断章のように思われる。こうした省察はもはや分析によっては表現されない。なぜなら詩人の前に現れる本質的なものは、多義的で矛盾に満ちているからである。シャールは、直喩や隠喩、逆接的表現、形容矛盾語法を含む相反する単語の結合、同一の音の繰り返し等によって、表現しがたいものを表そうとする。

(1) 時間

「イブノスの文書」は二種類の時間について語る。一方には、計測される万人に共通の持続があり、他方には、濃密で凝縮した時間が存在する。断章191を引用しよう。

最も垂直な時間、それは果実の中の仁が、その強情な持続からほとばしり出て、おまえの孤独を移転させる時だ²⁹⁾。

濃密な時間は、上昇としてとらえられる。それは水平に連続し加算されていく時間から、垂直に噴出する。この時間はまた自然界の生物の隠喩によって表現される(「果実の中の仁」)。こうした隠喩は、他の断章にも見られ、「時間、それはシバムギだ」³⁰⁾「ぼくは今日、絶対的な力と不死身の瞬間を生きた。ぼくは、その蜜と蜜蜂のすべてを連れて、高地の泉へ飛び立つ蜂の巣だった。」³¹⁾のように書かれている。こうした隠喩は、人間によって人工的に区分される時間に、有機体に内在する時間を対置するために、またこのほとばしり出る時間の、官能的なまでの豊饒さを表現するために使用されていると言えよう。

(2) 人間

人間もまた、前述の二つの時間を生きる存在として二面的存在である。たとえば、断章174では、「私」は次のように描かれる：「私は無数の崖でできた者——くぼみと炎症——つねに奔流の存在ではありえない³²⁾。」「奔流の存在」とは、エネルギーの満ち溢れる高揚した生の状態を表わし、先の噴出する濃密な時間を生きる存在と言えよう。「私」は、一方ではこうした存在であり続けることはできず、高揚から、傷ついて(「炎症」)失墜する(「くぼみ」)者でもある。

しかし、この断章で使用されている隠喩は厳格な二項対立を示しているわけではない。ここでは、シャールが故意に、厳密な対立構造を崩しているのが認められる³³⁾。これは、二元性への還元による認識を避けようとする意識から発するものに他ならない³⁴⁾。

それでは、さらに人間の精神的活動についての省察を観察しよう。まず、断章105には、「精神」が「ランプが消えるや、台所をひっかき、沈黙をめちゃめちゃにし、汚物をいじくりまわす虫のような³⁵⁾」という直喩で表現されている。このユーモラスで卑俗な直喩は、精神の重苦しい神聖化を拒絶しようとする姿勢の現れである。この姿勢は、あらゆる神話の拒否につながるが、キリスト教が問題となる時、断章の中では、宗教が語っていた内容が詩的装置によって逆転される。例えば、断章16には「天使とともにある知性」(«L' intelligence avec l'ange») が語られる。

天使とともにある知性、はくらの本源的な関心。

(天使、人間の内部で、最高度の沈黙の言葉、つまり算定されない意味を宗教的妥協から遠去けるもの、不可能の、活力を与えられた無数の房を金色に染める肺の調律師、血を知り、天上なるものを知らない、天使、心臓の北で傾いている蠟燭³⁶⁾)

ここで語る主体は、おそらく知が倫理性を伴わなければならないことを表現しているのだろう。しかし倫理性とは何かが問い直されなければならない。ここに「天使」というキリスト教の語彙が登場する。この「天使」が意味するものが、この断章の中心となる。この単語の重要性は、«intelligence»の[ʒã]の音が交差配列法により、«ange»[ãʒ]となって響くことによって強調される。「ange」の語は、さらに二度繰り返されて、定義される。この定義の中で最も重要なのは、天使が「天上なるものを知らない」存在だ、という点である。この逆説法により、ここではいわば地上の天使、「血」――現実の状況の残酷さに関わる倫理性が問題となっていることが示される。この逆説法の使用は、キリスト教に対する異議申し立てだが³⁷⁾、既存の宗教体系が与える天使を退けるならば、その空白は新たに詩人自身によって埋めなければならない。言語が妥協、虚偽から徹底的に遠去けられるならば、言語は無限に沈黙に近づいていくだろう。そこで、詩人は、隠喩を使用して表現しがたいものを表そうとする。まず音楽の隠喩である「調律師」と「肺」が結合される。「天使」は音楽のように調和のある秩序を整えるものであり、又生命を支えるものに関わることが表現される。さらに、この調律師は「不可能の活力を与えられた房を金色に染める」と修飾される。すなわち、天使は、「不可能なこと³⁸⁾」(l'impossible)を実現しようとする存在だが、この実現の表現のためにきわめて具象的な隠喩が使用されている。「調律師」は読み手の聴覚を喚起したが、今度は「金色に染める」という語が視覚に訴えかける。読み手には夕暮れの光が花あるいは果実の房を静かに染める光景が喚起され、天使が生命力のあふれる自然の秩序に一致していることが理解される。すなわち、ここで隠喩は読み手の聴覚、視覚に豊かに訴えかけながら、天

使が、調和、生命、自然に深く一致しつつ「不可能なこと」を成しとげる存在であることを表現する。

ここで「金色に染める」という単語によって天使の属性に光が含まれることが理解されたが、天使が「蠟燭」と定義される最後の一文によって、この属性はさらに強調される³⁹⁾。ここでは「Ange」[ãʒ]「bougie」[buʒi]と再び[ʒ]の音が繰り返され、「蠟燭」が、この断章の中の三つの主要な単語の一つであることが際立たせられる。地上の天使——倫理性は照らし出すものだが、今、広々とした場所に堂々と燃え立ってはいない。寒冷、厳しさを思わせる北方で傾いているのである。

(3) 詩

まず、詩についての比較的普遍的な考察を断章56によって見てみよう。

詩篇は狂暴な上昇だ、詩、^{ポエジー}非常なはしけの戯れ⁴⁰⁾。

濃密な時間同様、詩篇も上方に向かう運動としてとらえられる。詩篇はいわば、この凝縮した時間を生きる人間存在のエッセンスそのものなのだろう。それは二重の逸脱に特徴づけられる。一方では、暴力性に達するまでの日常的な感情からの逸脱であり、また、合目的性からの逸脱である。この断章の言葉そのものが、省略によって、この「狂暴な上昇」の激しい速度を表わしている。「^{ポエジー}詩」の三つの単語は、全く説明を省かれたまま次々に結合されて、濃密なイメージを創造している。

この定義の暴力性自体、詩人の置かれた状況の暴力性と深くかかわっている。「イブノスの文書」においては、詩も詩人も、おびただしい死に満ちた状況によって規定されている。隠喩と音の繰り返し詩人と状況とのかかわりをみごとに表現している断章6を検討してみよう。

詩人の努力は「古い敵」を「忠実な対抗者」に変えることを目指す。豊かな明日全体が、この計画の成功しだいなのだから。とくにあらゆる種類のヴェールがほとぼしり、からみつき、衰え、そして殲滅されるところでは。ヴェールのもとでは、大陸の風が自分の心を底知れぬ淵の闇に返している⁴¹⁾。

断章の前半では、詩作の目的が、豊饒な未来の実現にあることが語られるが、後半ではこの努力が行なわれている現在の場が、まず「ヴェール」の動きによって表現されている。最初これまでも登場した「ほとぼしる」(s'élance)という動詞が現われる。この動詞によって戦闘下での計画の成功のために、エネルギーが集中され一気に注がれる状態が表現される。しかし、状況

は容易なものではなく、s'élanceについて同音の([s] [l] [a])の繰り返しにより、s'enlace「からみつく」という動詞が現れる。エネルギーは効果的に使われずに、停滞し浪費されてしまう。このことは、続く「衰える」(décline)という動詞によってより明確に表現される。この動詞でも、s'élanceに含まれた[e] [l]の音が繰り返される。最後に衰弱は全滅に到る。déciméという「イブノスの文書」に何度か現われる過去分詞が登場する。この単語も、前の単語の[dé] [i]の音を繰り返している。このように、ここでは、戦闘状況の中でエネルギーが敵に向かって噴出するが、状況がきわめて厳しいために壊滅の危険の淵にあることが表現されている。ここで四つの単語が類似の音を次々に響かせることによって、絶望感と戦闘的意欲の共存、情勢の変化の速さ、危険の緊急さが表現されている。

さらに絶望的な意識は、où でつながれた関係節の中の隠喩によって強められる。「大陸の風」は“abîmes”の風と交流する。この abîmes は現在の状況が地獄の様相を呈していることを暗示しているのだろう。しかし、「風」の隠喩は、停滞せず動き続けること、つまり状況に抵抗し続ける意志をも表現する⁴²⁾。詩の機能は現状の容赦ない真実と、戦い続ける意志の共存を伝えることにあり、この断章は音の繰り返しと隠喩によってその表現に成功していると言えよう。

詩は、さらに進んで闘争を表現することによって、絶望的な冷えきった現実を燃え上がらせ、変革する力を持つ。断章171は、隠喩とアリテラシオンにより、この力を宣言する。

冷たさの灰は、拒否を歌う火の中にある⁴³⁾。
 灰は、拒否を歌う火の中にある⁴³⁾。

灰<les cendres>は、死を象徴するが、実際に詩人の周囲で焼かれる遺骸の具象性を担っていると考えべきだろう。「冷たさ」は、詩人が置かれている最も苦しい冬を意味する⁴⁴⁾。しかし、この冷たさ<froid>は、[f]のアリテラシオンにより、いきなり正反対のもの、「火」“feu”の中に置かれる。すなわち冷たさは燃え尽くして灰と化してしまうことができる。そして、この火がまさに、歌であり詩である。この歌の対象として、再び[f]音の繰り返しだが、断章の三つ目の重要な単語、「拒否」refusを導く。この断章では、隠喩と同一音の繰り返しという詩的装置により詩による現実の変革がみごとに表現されている。

IV 救済——音楽的断章

以上のように、『イブノスの文書』における言葉は、ある時は死を強制するものと戦い、ある時は死によって深められた思考によって照らし出される真実を表現する。しかし、こうした知的操作は、死からの救済をもたらすものではない。詩人は、個人を超える者に救済を求め、それが表

現されている断章はより抒情的色彩が濃く、また音楽性が強い。さらに、飛跳が随所に存在することが観察される。

(1) 音楽性——繰り返し

抒情的断章の音楽性を産み出しているのは、頭語反復を含む同じ単語、あるいは詩句の繰り返しである。断章141は救済をもたらすものが、「恐怖政治への対抗」として歌い上げられているが、救済への希望をかき立てるのは断章の音楽性であり、この音楽性は、*«c'est»*という頭語反復によってもたらされている。

恐怖政治への対抗、それはすこしずつ霧が満たしていくこの谷、それはしびれた花火のような葉むらのつかの間のざわめき、それはしっかり分配されたこの重力、「……」⁴⁵⁾

比較的長い断章に描かれている救済するものは、自然、生命、愛、未来である。自然については、そのはかなさと柔らかさが強調されている。愛はあくまで地上のものであり、恋人との間のエロティスム（「愛撫される顔⁴⁶⁾」「ほほえみながら曲がる生き生きとした色の胸⁴⁷⁾」）あるいは仲間との友情でもある。

あるいは、非常に短い断章21では、同じ詩句の繰り返しによる音楽性が見られる。

苦々しい未来、苦々しい未来、ばらの木の間での舞踏会……⁴⁸⁾

この前の断章では、戦後、独裁的な人々がもう一度権力に着くだろうという未来についての悲観的な予測が記述される。この記述が分析的、客観的であるのに対し、断章21は「苦々しい未来」(*«amer avenir»*)という詩句の繰り返しで、感情を直截に吐露する。ここでは、[a]音もまた四回繰り返され、音楽性を作り出すのに貢献しているが、二つ目のヴィルギユルの後で詩句は驚くような飛躍を見せる。すなわち、悲観的な未来とは、何の論理的関連も持たない自然の中での舞踏というイメージが置かれるのである。未来に対する苦い予測は、論理によっては覆えられない。しかしポエジーの音楽性が可能にする感情の流露は、一気に救済するもの：自然と舞踏を呼び起こす。この詩句でも*«bal parmi»*の中で[a]音が繰り返され、シニフィエの非連続性をシニフィヤンの連続性が補いながら、断章の音楽性を完成させている。

(2) 名詞文と命令文

こうした音楽性に支えられた救済を表現する断章には、二種類の統辞的特徴を持つ文が見られる。一方は、名詞文であり、もう一方は命令文である。

「イプノスの文書」の救済を表現する名詞文は、いわば抒情の結晶だけが注出された形式である。たとえば断章109では、

ぼくらの涙の上に落ちる夜を晴れやかにするための この花々のかぐわしい香りのかたまりのすべて⁴⁹⁾。

自然の官能的なかぐわしさが、苦しみに耐える人々の夜を救う。確かな重さを持つ生命の存在そのものだけが、動詞の省略された名詞文によって示される。「涙」が解き放たれるのは、戦う意志によって堅く閉ざされた心を柔らげる、このつつましい植物の救済する力によってである。

一方、行動する語の主体自身の決意を表すのに用いられていた命令文は、救済を求める断章の中では、祈願文となって現われる。この祈願文は、常に頓呼法とともに用いられるが、呼びかけられるのは、「こまどり」「アーモンド」「オリーブ」などの詩人に身近な南フランスの動植物である。断章82を観察しよう。

控え目なアーモンドよ、戦闘的で夢想家のオリーブよ、夕暮れの扇の上にぼくらの奇妙な健康さを配置してくれ⁵⁰⁾。

ここでも、すぐ近くの断章80で、「健康さ」についての考察が行なわれ、通常流布している「健康さ」の問い直しが行なわれている。断章82では、この幻想に過ぎない健康さに代わって、「ぼくら」が持つ特異な状況の下での健康さ、未知のものである健康さが表明されるのだが、この健康さは、「ぼくら」によって支えうるものではない。それは、壮麗な隠喩、「夕暮れの扇」が表現している自然の美しさに支えられるものであり、語る主体は、この支えを祈願する。呼びかけられる植物には、通常人間を修飾する形容詞が附され、こうした植物への親密な感情が表現されている。

(3) 解放：鎮魂歌と賛歌

前述したように、音楽的断章は「イプノスの文書」の最終部分で急に増加する。具体的に言えば、断章は全体で237あるが、断章220の一節目で、戦後への危惧が分析的な文体で語られた後、この後の断章のほぼ半数を占めるようになる。特に断章221は、「イプノスの文書」の中の唯一の行分け詩であり、ここで作品の文体の特質が変化していることを示す一つの指標となっていると言えよう。

ここで音楽的断章を増大させる要因となっているものは、戦争が勝利で終った時点での激しい疲弊の意識であろう。敗者と同じく、勝者も死者と同様の状態であり、それは、相反する二つの

名詞の結合、あるいは形容矛盾語法により、「勝者の遺骸⁵¹⁾」「生き残った弔鐘⁵²⁾」のような詩句で表現されている。闘争の中で抑制されていた絶望感が噴出し、「生命」に向い、自然に向って祈願が繰り返される。

断章は、いわば歌となって消耗しきった人間の、知的部分ではなく、存在全体に働きかけ、慰め、癒そうとする。断章221は、同じ詩句の繰り返しが、鎮魂歌のようなリズムを作り出す。

[……] 後には あるだろう、勝者の遺骸が
そして 悪の物語が、
あるだろう、愛の遺骸が
生き残った弔鐘には のばら、
あるだろう おまえの遺骸が、
その本影の上の おまえの動かぬ生の架空の遺骸が⁵³⁾。

無数の遺骸の記憶は、「おまえ」、すなわち語る主体自身に固定観念のようにとりつき、主体の未来全体を死のイメージで覆う。しかし、この無残なイメージを含む詩句は繰り返されることによって音楽性を作り出し、死者と、死者も同然の生き残った者たちの苦しみを鎮めようとする。だからこそ、ここには一筋の救済のイメージ、弔鐘にからみつく花のイメージが挿入される。

祈願と慰しの歌に続いて、「イプノスの文書」は宇宙的規模に拡大するイメージによって力強い解放感を歌う。名詞文による断章230には、

韻石の黄金の声の中に 八月の空、
はくらの親友である苦悶の力のすべて⁵⁴⁾

今、声を持つ者、語る者は個人ではなく、「韻石」である。「イプノスの文書」は共同体の声を写し取ることを超えて、宇宙の声を写しとろうとしているかのようだ。その声は戦った人々の苦悶を伝えるが、同時に夏の空の明るい広がりをも伝える。仲間達の苦しみは、広大な自然と並べられ、凝縮した名詞文によって賛えられる。

「イプノスの文書」の最後の断章と、この作品に添えられた散文詩「鎖のばら」は、美への賛歌である。

はくらの闇の中に、美のための場所はない。この場所のすべてが美のためのものだ⁵⁵⁾。

「美のための」という同一の詩句が繰り返される二つの文の間には、驚嘆すべき飛躍がある。

美のためのわずかな空間も残さずに「ぼくら」を覆っていた闇は一挙に消え、かわりに美がすべてを支配する。

「鎖のばら」では、美はとん呼法で呼びかけられる。美を構成するのは「文字」であり、美とは詩の美に他ならないことが理解される。詩集を閉じるにあたって、美は人間の行動（「責苦の名誉ある板」⁵⁶⁾「自分の運命を、それに対立するもの：希望で執拗に欺こうとする人間」⁵⁷⁾）と宇宙の秩序（「太陽のような単純さ」⁵⁸⁾）とを総合する。救済された美の、この総合する力が歌い上げられることによって『イプノスの文書』は完成される。

結論

戦闘下というきわめて特殊な状況に置かれた詩人に対して、死は、以上のように、まずナチズムと戦う言葉を産み出させた。この言葉は、詩人の意志から発する言葉であり、意識、知性と密接に関わっている。簡潔さ、冷徹さを特徴とし、また共同の言葉であることを目指し、伝達可能性と明証性を志向する。さらに、死は日常的な慣習、惰性的な感情、抑圧的な制度の下に隠されている真実を照射する。詩人は、隠喩、逆接法等の修辞学やシニフィヤンの連続性等の詩的装置を使用して、通常の言語の彼方にある、沈黙に近いこの真実を表現しようとする。この言葉は、意志、意識の操作範囲にとどまらない。又、伝達可能性と衝突しても、表現しがたいものを暗示的に示すことを志向する。『イプノスの文書』の言葉は、最後に、救済を祈願する。語る主体は死からの救済を既存の宗教体系に求めることは拒絶する。しかしまた、救済は、個人の意志や認識から得られるものではなく、個人を超えるものに求められる。感情の自由な発露の見られる音楽的断章が、祈りや賛歌の形でこの救済を表現する。この言葉は人間の存在全体を揺り動かすものであり、繰り返しを特徴とする。この言葉は、伝達可能性の困難を乗り越え、より深い意味での共同性を獲得する。

しかし、こうした三種類の言葉は、統一的な体系への意志のもとに組織されているわけではない。行動の決意を示す断章が詩集を開き、救済を表現する断章が詩集を閉じるというゆるやかな構成への意志は確かに存在している。しかし、こうした断章自体、詩集の途中の部分にも断続的に見られる。死の隣接は体系への意志を粉々にし、相互に全く矛盾する性質を持つ断章を、非連続的に並置する。そのことによって対独抵抗運動の中にあった詩人の意識が、できうるかぎりそのままの形で伝えようとされているのである。

註

- 0) ルネ・シャールの作品からの引用は, René Char, *Oeuvres Complètes*, Gallimard, 1983年による。
(以下略号 O.C.とし, 引用箇所については注に頁数を記す。) 翻訳は, 既訳のあるものについては参照
させて頂いたが, 原則として拙訳である。
- 1) 1943年にムッソリーニ政権は倒れるが, ドイツ軍による北イタリア占領は, 南仏の危険を増大させ
る。9月にはヴォークリューズでレジスタンス運動員の大規模な一斉検挙が行なわれ, 11月にはセレ
ストから10キロほどのヴァシェールが攻撃される。
- 2) Jean-Claude Mathieu, *La poésie de René Char ou le sel de la splendeur*, José Corti, 1988 (以
下 P.R.) と略す pp. 199-200 参照。
- 3) 「イブノスの文書」の断章157は, エミル・カヴァニについて語り, 断章138はロジェ・ベルナール
の処刑を描写する。「鎖のばら」は, シャールがロジェ・ショードンの処刑を知った直後に書かれる。
(cf, P.R. pp. 206-208)
- 4) O.C. p. 173
- 5) O.C. p. 189
- 6) P.R. p. 213, pp.220-221 参照
- 7) O.C. p. 173
- 8) O.C. p. 175
- 9) O.C. p. 218
- 10) O.C. p. 219
- 11) 「未知なるもの」(“l'inconnu”) は, 言うまでもなく, ランボーの1871年5月13日のジョルジュ・
イザンバル宛の手紙の中の一節「『あらゆる感覚』の錯乱によって未知なるものに到達することが
問題なのです」及び1871年5月15日のポール・ドメニー宛の手紙の中の「詩人は『あらゆる感覚の長
く, 絶大で, 熟慮された『錯乱』によって『ヴォワイヤン』になるのです。(……) というのは彼は『未
知なるもの』に到達するのですから。」に由来する。さらに, 「旋回する」(tournoyer) という単語
も, ヴォワイヤンスに基づくと思われるランボーの詩に頻出する単語であり, たとえば, 『イリュミナ
シオン』の「通俗的な夜想曲」には「右のガラスの高みにあるきずの中では, 月の蒼冷めたかたち,
葉, 乳房が旋回していた」と書かれている。(Rimbaud, *OEuvres*, édition établie par Suzanne
Bernard et André Guyaux, Garnier, 1987, — 以下 R.O. と略す — pp. 345-346, p. 348, p. 286)
- 12) O.C. p.225
- 13) 断章174には, 「もし不合理がここで支配者となっているなら, ぼくは帯電防止剤であり, ぼくを最
大の悲痛な機会に近づける不合理を選ぶ」と書かれている。(O.C. p. 217)
- 14) O.C. p. 180
- 15) O.C. p. 202
- 16) O.C. pp. 205-206
- 17) O.C. p. 199
- 18) O.C. p. 199
- 19) O.C. p. 205
- 20) O.C. p. 182
- 21) O.C. p. 184
- 22) O.C. p. 184
- 23) O.C. p. 224

- 24) Daniel Leuwersはその論文«Violence du poème», in *Lectures de Roméo Char*, Editions Rodopi B.V., Amsterdam - Atlanta., 1990, p. 41 でシャールはマニ教的見方とは無縁であり、ナチズムを歴史の点的偶然事ではなく、人間性の中心に横たわるものと捉えていると述べている。
- 25) O.C. p. 182
- 26) O.C. p. 228
- 27) O.C. p. 228
- 28) O.C. p. 197
- 29) O.C. p. 221
- 30) O.C. p. 181
- 31) O.C. p. 223
- 32) O.C. p. 217
- 33) シャールの言語における非対称的な構造は、しばしば指摘されているが、たとえば、Eric Marty は、「イプノスの文書」には真に論理的に正反対なペアはまれであるとし、非対称的なペアとして espoir-destin, hymen-devil, poison-breuvage, beauté-maladie 等を挙げる。(Eric Marty, «Feuillets d'hypnos», in René Char, *Fureur et mystère*, Les Matinaux», presses de l'école normale supérieure, 1991, p. 65)
- 34) 断章116には、「存在の中に現われる二重性を、過度に尊重するな。実際は、鉦脈は多数の場所に分割されている。(……)」と書かれており、二元性による認識ではなく、複数性による認識が提唱されている。(O.C. p. 202)
- 35) O.C. p. 200
- 36) O.C. p. 179
- 37) *Rhétorique Générale* には、逆説法はある現実性に対する異議申し立てのレトリックであると述べられている。(le groupe μ , *Rhétorique Générale*, Librairie Larousse, 1970. pp. 142-143)
- 38) この«l'impossible»も又、ランボーを踏まえた言葉であろう。実際 *Une Saison en Enter* の«l'impossible»の中には、「もし精神がこの瞬間からずっと目覚めているなら、ぼくたちは間もなく真実に達し、真実はおそらく、その泣いている天使とともに、ぼくたちを取り巻くだろうけれど。」と天使が描かれる節が見られる。従って、«l'impossible»でランボーが述べているキリスト教批判と真実に達することの困難を、この断章に重ねて読むべきかと思われる。
- 39) Daniel Leuwersは前掲の論文のp.40 でシャールがしばしば希望を光と同一視していると指摘している。
- 40) O.C. p. 189
- 41) O.C. p. 176
- 42) 「風」は、その運動性により、シャールの中では肯定的な位置を占める。それは、重苦しさの対極にあるイメージでもある。断章228には「模範的な人々は、蒸気と風でできている。」と書かれる(O.C. p. 230)
- 43) O.C. p. 216
- 44) シャールは、「イプノスの月」の中で、1943年から1944年にかけての冬を「最も困難な試練の時」と述べている。(O.C. p. 641)
- 45) O.C. p. 209
- 46) O.C. p. 209
- 47) O.C. p. 209
- 48) O.C. p. 180
- 49) O.C. p. 201

- 50) *O.C.* p. 194
- 51) *O.C.* p. 228
- 52) *O.C.* p. 228
- 53) *O.C.* pp. 228-229
- 54) *O.C.* p. 231
- 55) *O.C.* p. 232
- 56) *O.C.* p. 233
- 57) *O.C.* p. 233
- 58) *O.C.* p. 233